それは目立ってしまったということだからダメなんだよ。と教えられました。あくまでもその時の演奏会の主役が素敵だったよ。と褒められることが大切で、そのように褒められたらそれは囃子方の功績でもあるんだよ。と言われてきました。ある意味この辺りがキチンと出来るということが個性となってくるのが芸なのかな、と言えるのかも知れません。

3．会員情報

文楽　吉田勘彌先生
　　令和２年度国立劇場文楽賞・文楽優秀賞受賞

能楽　大倉源次郎先生
　　『能から紐解く日本史』出版

琉球舞踊　志田真木先生
　　文化庁文化交流使任命

おめでとうございます！！

4．新入会者

中山　妙子さま
馬野　正基さま　能楽　観世流シテ方
蔡　　美京さま　埼玉女子短期大学 比較舞踊学会
児玉　裕樹さま　福祉関係
花崎　玉女さま　地唄舞　舞踊家　指導者
奥村加代子さま　日本舞踊名取/三味線お稽古
上野　孝子さま　主婦

Welcome！！

皆さまと楽しくお目にかかれる日が早く訪れますように☆

むすびの会 HP　http://www.musubinokai.org
むすびの会の活動は、facebook でも随時公開中です。

発行　2021 年 3 月　特定非営利活動法人　日本伝統芸能教育普及協会　むすびの会
〒145-0071　東京都大田区田園調布 1-12-14-207　　http://www.musubinokai.org

特定非営利活動法人
日本伝統芸能教育普及協会
むすびの会
会報 18 号
2021 春

2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響で世界が一変してしまいました。欧州では落着きを取り戻しつつありますが、日本ではまだまだ緊張が続きます。コロナ後の世界がどのようになってゆくのか文化芸術の存在がどのように必要とされてゆくのか考えて行きたいです。

むすびの会設立 20 周年に向けて

森田ゆい
むすびの会事務局長　兼任理事
東京立正短期大学 准教授

むすびの会は、学校教育現場で伝統芸能を体験的に学ぶ機会を増やしていこう、＜子ども達＞と＜伝統芸能＞を“むすぶ”活動を行っていこうという考えの元、伝統芸能実演家＋学校教員＋研究者らで 2002 年 10 月に設立しました。その後、茶道など生活文化を含めた伝統文化を扱うこと、また子ども達につながる存在として大人も活動対象として加え、体験の機会の提供や研究活動を行って参りました。

設立当時は体験的講座を意味するワークショップという言葉がまだ一般的には知られておらず、今では頻繁に行われるようになった学校でのゲストティチャーによる特別授業も珍しいものでした。

活動を続けていく中で、教育現場においてまず東京都が 2006 年に「伝統・文化教育」を学習の中に取り入れるようになり、現在では幼(2018 年)・小(2020 年)・中(2021 年)・高等学校(2022 年)いずれの新しい学習指導要領改訂の中でも「伝統や文化に関する教育の充実」が明記されました。むすびの会にとっては望む方向での変化です。但しどの教科の単元で扱うのかといったことや伝統や文化として何を扱うのかは、現場に任されているため、学校現場には負担があるようです。

そこで、むすびの会ではこれまでの活動実績と教育への熱意を持つ実演家の先生方のマンパワーを活かして、学校現場で期待される子ども達に“伝えたい内容”を学習指導要領に沿う形で伝える授業作りに頼りになる団体として社会に役立てることが出来れば良いのではないかと私は考えます。

2002 年の設立時は、伝統芸能において異ジャンルの実演家の先生が一緒に活動する団体も、実演家・学校教員・研究者らが一緒に活動する団体も大変に珍しく、どちらにおいても東京都で最初に出来た NPO 法人がむすびの会でした。会員の皆さまが日本文化の特徴とされる“異文化を受け入れる力”を豊かにお持ちであることからこれまで活動を継続することが出来たのだと思います！

20 周年（2022 年）目も、むすびの会ならではの団結力で意義ある活動を継続して行きたく、会員の皆さまには引き続き何卒よろしくお願い申し上げます。

活動報告

1．通常総会

2020.6月　第 18 回通常総会は新型コロナ感染症対策の為、書面にて実施

2．研究公演主催　（参加者 30 名）

2020.12.6(日)14：00～15:30 西川流稽古場舞台

テーマ:能と日本舞踊『山姥』の世界

出演者：狩野了一　能楽　喜多流シテ方
大島輝久、金子敬一郎　能楽　喜多流シテ方
西川祐子　日本舞踊家　宗家西川流
福原百之助　鳴り物

研究者：三浦裕子　武蔵野大学能楽資料センター　武蔵野大学教授

1）『山姥』についてのお話

本公演の目的
中世芸能である能・狂言は近世芸能である歌舞伎・文楽、そして日本舞踊に多大なる影響を与えた。今回は＜山姥＞を軸に、能と日本舞踊を比較し、双方の芸能の理解を広めることにあります。

近世芸能・近世邦楽としての「山姥物」について

「山姥もの」はなぜ邦楽にたくさんあるのだろう。山姥のイメージも多種多様である。興味深い題材である。

山姥は女に違いないが、ただの女ではない。鬼の様相を持っている。超人的で

西川：緊張はします。今はやりの言葉でいえば“全集中”でしょうか。全集中をどのように出来ているかということがとても大事なような気が致します。ご覧頂く方が心配になるような方向に緊張が落っこちてしまうこともありますが、よい緊張に持っていけるように心掛けています。

②舞う時、踊る時にどんな想像をしているのでしょうか？

狩野：舞う時には、あまり余計なことは考えないようにしています。曲の内容に関することは稽古の時に色々と考えますが、本番では出来るだけそういうものが無い状態に自分を持っていきたいと思っています。

西川：稽古では色々と想いながら、稽古を重ねますが、本番では音がなればそういうものとは離れて、観てくださる方が色々と想像が出来るように、こちら側の引っ込み具合を大切にすることが大切なのかなと思っています。

③観客を意識して舞いますか？

狩野：あんまりお客様を意識しないようにしています。

西川：客席までの空間などは意識しますが、お客様にどう見えるかというようなことは考えません。

④狩野先生にお伺いします。舞いながら謡うのは苦しくないのですか？

狩野：舞いながら謡えるように訓練はして来ています。また謡は喜怒哀楽を息があがってしまうような激しく表現する感じではなく、型の中でおさめて表現します。

⑤伝統芸能を継承する上で、受け継いできた型での表現がメインとなると思うのですが、個性と型のバランスについてお考えになられていることはありますか？

狩野：難しい質問だと思いますが。能の場合には、面をかけて、装束を付けると個性を隠すような姿になって、面をどう活かすかというのが最重要課題となります。自分の個性みたいなものを出してしまうと、面が死んでしまう、ただの仮面になってしまう。自分自身を抑制していないと面がいきてこない。でもいくら個性を抑えようとしたところで、その人自身というものがにじみ出てくるようなものではないのかなと考えていて、型というもので一つの形にはめた上でその人自身の個性というものがにじみ出てくるのがいいのかなと考えています。

西川：無色透明なように踊るようにと指導を受けてきました。ただ踊り用の身体はしっかり作っていくように心掛けています。型で押さえた中にも自然とその人の個性は出てくるというものなのではないのかなと理解しています。

福原：自分を出すような演奏をしてはいけいないと教えを受けて来ました。いつ音が入っていったのかお客様に気がつかれないような演奏がいい演奏だと言われてきました。僕らは伴奏音楽を担当していてあくまでも主役ではないので、まずは囃し立てるべき対象が非常に美しくなりたつように盛り上げることが大切と言われました。お客様に例えば「鼓、良かったね」と言われたら、

4）日本舞踊　創作山姥「花へんろ」

立方　西川祐子　作曲・鳴り物演奏：福原百之助

5）質疑応答

①緊張はしますか？

狩野：緊張はします。ある程度緊張は必要かなと思います。日常と一緒というのは違うので。色んな緊張があると思います。今日も物凄く緊張しました。

ある。スーパーウーマンである。

その山姥に人間性を強く添加したのは近松門左衛門であった。近松は山姥の前身を遊女とし、しかも子まで産ませた。

　後の豊後節では、母性愛まで協調することになる。山姥からしだいに鬼のイメージ、スーパーウーマンのイメージが取り去られていく。恐ろしい山姥から愛すべき山姥に変身する。　　『季刊邦楽』第十九号，1979 年

今から見る能の仕舞の「山姥」は恐ろしい山姥。そこに愛すべき山姥の要素も入っている。次に観る日本舞踊の「山姥」は愛すべき山姥の面が多くみられるのではないか。

能の『山姥』の作品は、「山姥」とは何ぞや？と問いかけ続けるような作品になっていて、その答えは、点で描かれている。抽象化されて表現されているように思われる。

それが近世芸能になると具体的に描かれているようになっている。中世に点で描かれて来たものが、近世になると面として、あるいは立体として描いている違いがあるように感じます。

能『山姥』のテーマソングとなっている節

「よし足曳の山姥が。山廻りするぞ苦しき」は次のように説明されます。

“善かれ悪しかれ、善悪の差別に引きずられて憂世に執着し、重い足をひきずりつつ山姥が山廻りする苦しさよ”岩波日本古典文学大系『謡曲集・下』1963 年

日本舞踊『花へんろ』創作：山姥

近世芸能の山姥物は四季に山廻りをするのがテーマとなっている。本日の作品では、春：太鼓　夏：大鼓　秋：小鼓　冬：太鼓　の打楽器のみの演奏に合わせて踊られる作品となっています。季節と一体化しながら花を求める美しい山姥が踊られます。

2）鼎談　能楽師✖日本舞踊家✖研究者

狩野了一（喜多流シテ方）

✖

西川祐子（宗家西川流）

✖

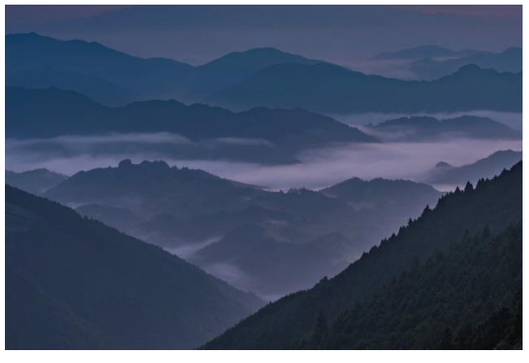
三浦裕子

ー「山姥」とは何ぞや？という質問からお伺いします。

狩野：「山姥とは何ぞやというのは、能楽師にとっての一大テーマでございまして、それぞれがイメージをふくらませながら、それぞれの流儀の中の教えを守りながら務めさせていただいておりますが。大きなテーマと曲のスケール感があり、謡と舞と非常によくできた曲で、能楽師にとっては非常に憧れの作品で、一度は演じてみたいと思う曲です」

ー本日舞って頂く仕舞クセの中に山姥とはどういう存在なのかというのが描かれている訳ですが、どういうお気持ちで謡ったり舞ったりされていますか？

狩野：「宗教観のある言葉が連なっていたりするんですが、ひとつひとつの文言は、意外ときちんと意味をとれば、さほど難しいことは言っていないのかなと思います。ただ自然そのものというかこの世界の摂理みたいなものを、天と地、自然界、そこにある人間。天地人の存在のようなものを説いているような詞章なのかなと思います。ただそれを自分が舞う時に表現するということではなくて、全体的なイメージとして捉まえて舞うというか、“教え”としては、先人たちから「とにかく山姥というものは舞って舞って舞い尽くすものだ」とか「際限のない山だ」とか、「とにかく強く舞わなければならない。肚を据えて舞わなきゃいけない」とかそういう“教え”だけしか受けていないので、「塵積もって山姥となれる」という詞章が出てきますが、それと同様に年代とともに積み重ねていくものだと思っているのですが、“表現をする”ということではないのかな、と理解しています」



ー祐子先生の作品は時々お能の詞章が湧いてくるような感じが致しましたが、先生の方でお能の方を意識されたりなさったのでしょうか？

西川：舞踊の山姥では年をとった女性といった設定が多い。もしくは母親という設定。近代邦楽の中で様々なジャンルで「山姥」をテーマにした曲があるということは、魅力のある作品なのであろうと思います。その原点である能の「山姥」をしっかり見てみたいと思って、勉強はしました。

狩野：芸能者の根本みたいなところがあるように思います。自分達の姿、苦しい、苦しい稽古を重ねながら、、“足曳の山姥”が芸能者の人生が山姥と重なる姿を現しているような気がします。演じる役者によって、いろんな面・装束の色の取り合わせなどによってそれぞれの能役者が考える山姥像があり、無限に広がりのある能の中でも類を見ない作品だと思います。

ー私自身も能のお稽古で「山姥」の謡を師匠に謡っていただいたのですが、師匠が先人達のイメージの蓄積や厚みがある中で謡っていただいているな。と感じました。

狩野：先人たちの想いが巨大な壁となって立ちはだかっているイメージがありまして。体力、気力を尽くさないと舞えないですね。

ー祐子先生にお聞きします。日本舞踊では歌詞があって歌詞に合わせて振りが付くイメージがありますが、今回、先生が創られた「花へんろ」は囃子を伴奏に踊る点に斬新は発想が見られます。そのようなことをお考えがあられたのでしょうか。

西川：江戸から今の時代への変化を何か活かせないかと思いました。今、古典が日本全体で共通認識としてはなかなか存在していません。けれどもそれぞれの心の中には、江戸時代から変わらないものはきっとあるのではないかと思います。見て頂く方に自分の人生が見えるようなスケールのある舞踊を作れないかしらと考えた時に、言葉の縛りで踊る人物が限定されない方が良いのではないかと考えて、お囃子だけの舞踊を創ってみました。

ー季節毎に楽器が違うのは先生のアイディアですか？

西川：いえ、それは作曲してくださった福原百之助さんが考えてくださいました。能の囃子との違いに近世邦楽の違いに邦楽囃子方が笛以外の打楽器を全て演奏する前提が異なりますので、能楽との違いを強調できたらとも考えました。

３）仕舞『山姥』クセ

仕舞：狩野了一

地謡：大島輝久、金子敬一郎

本研究公演の様子はむすびの会の HP にてリンクの貼られた Youtube で公開されています。
是非ご覧ください！